

## 「天眠小林政治伝」の試み (一)

——天眠と『よしあし草』・『関西文学』について——

宮 本 正 章

はじめに

【明星】満百号・終刊号（明治四十一年十一月）に掲げられた新詩社友の肖像は、森鷗外の陸軍省官房における一頁大の写真を最初に

して、知名の文人たる上田敏、馬場孤蝶、蒲原有明、薄田泣菫、厨川白村を一頁に収め、以下知名度、同郷等の共通事項でまとめて、

その(四)に、与謝野寛を中央にして、平野万里、茅野蕭々、与謝野晶子という寛が最も信頼する人々の中に、天眠小林政治の肖像がある。

大阪の毛布商で、歌は不得手として明星派の歌人でもなかった小天眠が何故にかくも与謝野寛から厚遇されたのか、鉄幹・晶子の無名時代からの相許した友ということもあつたが、寛がこの終刊号

の冒頭の「感謝の辞」に、

「八年の久しき間匿名の下に毎月経費の不足を補はれたる」

大阪の紳士小林政治氏と記したところに、その原因はあつた。藤田福夫氏の言を借りれば、「新詩社のパトロン」(『国文学』第九卷第十五号、昭和三十九年十二月)としての位置にあつたのが、小林天眠であつた。

天眠小林政治は明治三十年代の『少年文集』(博文館)や『文庫』

(内外出版協会)の関西在住の投書家達、春雨中村吉蔵、梅溪高須芳次郎、酔夢西村真次、酔茗河井又平、清白伊良子暉造に伍して創作面で名を知られ、一方、明治三十年四月三日には、中村春雨や高須梅溪等と「浪華青年文学会」(のち「関西青年文学会」と改称)をおこし、機関誌『よしあし草』(明治三十三年八月『関西文学』と改称)を同年七月十八日に創刊して、盛時には、大阪以外の土地では、神戸・堺・岡山・姫路・東京・京都・和歌山・河内・奈良・北条・津山に支会を設け、千二百余名の会員を擁するほどの組織に発展させた

功労者の一人であった。

少林天眠ははやく創作活動から遠ざかり、実業に専念したために、文芸ではその才華を発揮し得ずに終わった。しかし、毛布商として成功したのちも、文学への思いは捨て切れず、新詩社への援助以外にも「旧い友人が文学者として独立するようになると、絶えず後援を惜しまなかった」<sup>①</sup>（河井醉茗）人であった。

私がこの稿で綴ろうとするのは、小林天眠の文学的閥歴である。さすれば、事はおのずから明治三十年代の『よしあし草』を中心にすえた文学的活動になるう。ひとまず、明治三十四年二月の『関西文学』（六月）の終刊までを綴ろうと思う。

注

① 『熱情の人』『創業六十周年』小林政株式会社 昭和三十三年十一月二十五日

一

天眠小林政治は小林達二郎、久仁子の二男として、明治十年（一八七七）七月二十七日に兵庫県加西郡北条町に生まれた。ここは、天眠の記述に従えば、

「姫路から五里余、東北の山間に当る盆地に在って、六百戸許りの小邑ではあるが、古来由緒久しく、維新以前までは天領で田安

「天眠小林政治」の試み (一)

家に属し、大阪長柄役所の支配を受けてゐた。随つて京阪の文化に浴する事も早かつたらしい。」  
『毛布五十年』<sup>①</sup>

という土地であった。ちなみに、北条町はのちに加西町、泉町と合併して加西市になっている。

小林天眠は十歳のおり、叔父小野寺秀太の勧めで、明石の小学校に転校した。叔父は天眠を自分と同じ医師にするつもりで、その指導薫陶を引き受けたのであった。

明治二十二年、天眠は兵庫県立姫路中学校に入学した。入学後は、幸田露伴の「露団々」（明治二十二年）や「一口剣」（二十三年）、尾崎紅葉の「南無阿弥陀仏」（明治二十二年）、「伽羅枕」（二十三年）等を愛読したという。天眠が文学書を手にとるようになったのは、叔父秀太の弟の小野寺隆之助という医学修業中の若者が小学生の天眠に「里見八犬伝」や「白縫物語」を読ませた影響であったという。

「生意見にも飲酒喫煙、盛んに天下の大勢を論じ合ふ」<sup>②</sup>たという天眠の中学生々活も明治二十五年に中途退学することで終わりになった。故郷の北条町へ帰った天眠は病氣療養につとめていたが、両親は天眠を己が膝下に留めたい意向から、ちよとど新設中の北条電信局の技手にしようとした。しかし、叔父秀太の反対で実現しなかった。叔父は天眠を今度は実業で身を立てさせようと思ったからである。

明治二十六年、天眠は叔父秀太の縁故先の西村某の紹介で、〇木呉服店へ丁稚奉公に出ることになった。このおり、年令を十五歳と少なく偽っていたという。

天眠の丁稚生活を「毛布五十年」からまとめてみよう。<sup>③</sup>

クリクリ坊主にされた頭に饅頭笠をかぶり、商品を積んだ丁稚車を引いて、市内の呉服屋廻り、手代は日傘をさして悠然と歩く。市内だけではない。毎月数回は遠く堺の町まで出かけた。休みは一年間に僅か七日だけ。

外廻りだけではない。内でも辛い仕事が続いていた。ランプ掃除、火屋を鍛さないよう、石油をこぼさぬよう、灯心をゆがめずに切るようにやかましく言われた。

雑布がけ、風呂焚き、その水は土佐堀川や横堀川へまで汲みに行った。

さらに、荷造りして仲仕のかわりに川口、安治川、木津川へ運ばされる。

そのほか豆腐屋への使い歩きから、厨房の手伝いまでもあった。番頭、手代にはこき使われ、一つ間違つとそろばんで頭をぶん殴られた。生意気な中学生から、こうした丁稚生活への境遇の激変に「予て覚悟を決めた堅忍不拔の志も幾度か挫折せむ」とする状態であったという。さいわいこの呉服屋の奉公は半年位で終わった。

「肺患の令嬢の看護を手伝はねばならぬ破目となったのに辟易」してこの家を出たのであった。

次の奉公先は、毛布問屋の西村喜八商店であった。毛布問屋は春から夏への半年間は閑散で、好きな読書ができたから、天眠にはうれい職場であった。軽蔑され、偏屈者扱いにされながら、せつせと読書に励んだので、おかげで悪所通いの誘惑を避けることができたとという。

天眠はやがて『少年文集』（明治二十八年七月―三十一年九月）や『文庫』（明治二十八年八月―四十三年八月）に投稿しはじめた。

「創作の原稿は、半紙を四つ折にして膝の上に乗せ、心齋橋筋に面した店頭で手紙でも書くかのやうに粧ひ、真書筆で細記して居ましたが、二十四字詰め三百行位のものならば、三枚位に書き込まれたものです。その当時には指先に筆だこの出来る位の熱心さで、少し膏が乗って筆が順調に走ってゐる最中に、半夜燈の電燈がパッと消えると、裸蠟燭を点じて書き続ける。着想が半途で頓挫した時には、折ふし雨の夜すがら濡れに濡れて中の島公園や、或は桜の宮辺へまでも足をのばして歩きつ、想を練つたものです。」「附その頃を語る」『四十とせ前』。

こうして生まれた天眠の小説は、およそ三十編あったといひ、昭和十四年九月六日に小林政治商店の「創業四十年」記念として、

「旧作掲載の諸雑誌を物色蒐集し、二十余編を写し取るを得たので、その中より十二編を選び」出して、『四十とせ前』として出版している。

ちなみに、天眠の処女作は、「難破船」(『少年文集』第二卷第四号、

明治二十九年四月十日)で、海で父を喪い、病気の母と暮らす孝行者の少年が、ある夜難破船を救助するために決死隊に加わり、全員を救出す。その船には遭難したはずの彼の父も乗っていた。一家に幸福がもどり、少年は人命救助の功によって、県知事から表彰されるという筋である。天眠が記すところによれば、この作品はナショナルリーダーに載せる“Saved from the Sea”の翻案であったという。明治二十六年に脱稿したとあるから、天眠の満十五歳八ヶ月のわりの筆であった。冗漫さのない、練達の文章で、作者の早熟の才には驚ろかされる。選者の評も「ナショナルリーダーに載せる『セーブト、フロム、ゼ、シー』と題する話を種に取りたるにあらざるか。若し然らば巧みなる翻案と云ふべくして、甚妙。又創作ならば更に妙なり。——中略——十五歳の少年には感ずべき腕前と云ふべし」とあった。この作は、「地賞」入選であった。

注

① 「播州の役者村に就いて」『毛布五十年』小林政治 昭和十九年六月五日。

② 「丁稚の修行」『毛布五十年』

③ 前掲の文章および『四十とせ前』「附その頃を語る」を参照する。

④ ⑤ 『四十とせ前』「附その頃を語る」 昭和十四年九月六日、非売品。

一一

明治三十年四月三日、大阪在住の『文庫』や『青年文集』の投書家達が難波の翁亭に集まって、「浪華青年文学会」を結成した。

会の発起人は、中村吉蔵、高須芳次郎で、発起会員には、石橋由太郎、稲永直治郎、堀部宇三郎、田中清、中山正次、上田勉、山川伝之助、山本栄次郎、松浦愛造、阿部豊蔵、小林柁吉(筆者注、天眠のこと)、小石孚次郎、浅井新一郎、桐石卯太郎、北住三之助等がいた。右の十七人が当日集まった人々で、幹事長には春雨中村吉蔵、幹事には梅溪高須芳次郎、清風河野豊蔵、青麟小石孚治郎が選出された。

当日の翁亭の様子が天眠によって面白おかしく描写されている。

「何分にも其頃は、誰もがまだ世慣れない純心な少年時代で、殊にいづれも初めての顔合せでありましたから、皆温順しく煎餅をかじり抹茶を呑んで、文学談をやって居りますと、因らず基督信者の中村春雨君と日蓮信者の山川伝之助君との間に、猛烈な宗論がオッ始まりました。

両君は口角泡を飛ばせ額に青筋を立て、互に一歩も譲らず激論をつづけ、仲裁をしても中々寄せつけないで、一同ほとく困って了ひました。すると其の時突然空の一隅で朗々と詩を吟じ、立ち上って剣舞を遣り始めた人がありました。それは河野豊蔵君でありました。同君は晩年大阪朝日の広告部に入り程なく没しましたが、可成り飄軽な男でした。其の時も尻ビリ腰で「……途中大便を催はず……」と言ったやうな、滑稽な剣舞だったので、一同思はずドツと笑ひ出し、為めに流石頑強な？両君の論戦も漸く鬼がついたのです。」

「四十とせ前」、附その頃を語る」

中村春雨、高須梅溪は八軒家の大阪郵便為替貯金管理所の書記補であり、春雨は島町の実業学館（館長土井晋吉）という簿記を主として英漢数をも教える私立学校に寄宿する学生でもあった。<sup>①</sup>他の会員達も似たような境遇で、ほとんどは「部屋住み」であった。

この浪華青年文学会の発会式で以後は、隔月一回、十日の夕刻から例会を開くこと、春秋には大会をもつことが定められた。最初の例会場になったのは、大阪市内淡路町の龍泉寺であり、それ以後は安土町の書籍商事務所が使用された。

明治三十年七月十八日、浪華青年文学会の機関誌として『よしあし草』が発刊された。たった十八頁の小さな雑誌であったが、その

「発刊の辞」には、「目的とする所は申迄も無之一は会員相互の気脈を通ぜむがため二には有為の青年文士として鬱勃たる情懷を吐かしめむが為生れ出で候」と述べるなど意気壯んなものがあつた。

この第一巻第一号の内容は、時文・小説・雑録・新体詩・和歌欄に分けられているが、これは佐藤儀助（橘香、のちの新潮社社長義亮）編集による「新声」に全くよいかかった編集方法であつた。<sup>②</sup>中村春雨、高須梅溪が「新声」の投稿者であつたことによるのであろう。

天眠は第一号に小橋という筆名で、「沖の石」という短編を載せている。

小作百姓久助の娘お信は地主の若旦那と恋仲であるが、若旦那には許嫁があつて、二人の恋は成就しそうにない。親の久助は大旦那の頼みだからと若旦那を思い切るよう娘を口説く、お信は恋を断念すると父に誓い、日頃自分に言い寄る白痴の与太郎を使って愛想づかしをし、池に身を投げて死ぬといつた筋立てで、とり立てて珍らしいものではないが、

「味気なき浮世に果敢なき逆ま事と深く歎きつ、只管に吾子の後世を吊ひて又余念もなし、只だ奥の間の小やけき仏壇に、日夜絶間なう立ち昇る線香の煙は、細く薄く長へに恨を罩めて、梵唄の声と共に降り濺ぐ老の袖時雨、いやが上に繁し。」

といった文章は小説の手練てなの感が深い。ちなみに天眠はこの作の四

ヶ月前に「菊松」という小説を書いて、『少年文集』（第三卷第三号）に「地賞」になっていた。従つて天眠は実力ある小説書きとして、会員達から一目おかれる存在であつた。この小説の署名は小橋となつてゐるが、X字庵という号も使つた。

明治三十年の七月から九月の間に、浪華青年文学会の組織面に變更が生じて、新しく中尾鷲夢を会頭に、幹事長に中村春雨、幹事に高須梅溪を据え、会計部に出納主任として中尾鷲夢、簿記主任臨時代理として堀部靖文、庶務部主任高須梅溪、幹事小石青麟という新体制になつた。鷲夢は大阪実業学館が刊行してゐた『文学評論』の編集者で、学館の学生であつた中村春雨の懇懇によつて参加することになつたらしい。鷲夢は積極的に在阪の文壇人や東都の著名文人を会にとり込んでゐた。たとえば、本会客員として、須藤南翠、渡辺霞亭、井上笠園、菊池幽芳、岡根黙庵、三木天遊、本会賛成員として、加藤紫芳、磯野秋渚、木崎好尚といった人々、目下照会中であるが漸次快諾を得ようという人々に、幸田露伴、尾崎紅葉、坪内逍遙、巖谷連、畠山健、柳井齋綱、嶋村抱月、後藤宙外、小栗風葉等。それが文学的理想に燃える梅溪や天眠には、売らんかな的な経営方針としか思われず、その人物も俗物であつたので、早々鷲夢追放運動が起きたらしい。その上、鷲夢自身も会計上の問題をこし、十一月には会から絶縁の宣告を受けるに至つた。

しかし、この朝令暮改的な鷲夢会頭解職事件は一般会員には、よく理解できず、その上、鷲夢方針に賛意を表する会員も少なかつたらしく、多少の紛擾を来たしたとみえて、編集部では次のような檄に似た会告を出している。

「仮令裡に鷲夢会頭解職の一件ありと雖、亦如何なる困難に遭遇するも吾人の心鉄石の如し、豈中道に沮喪するの愚を為さむや、文学会斃れて吾人亦初めて斃れむ耳……諸子幸に吾人の微衷を諒して一臂の助力を与ふるに吝なる勿れ。」（第一卷第三号）

このように、編集方針を巡つての多少ゴタゴタがあつたが、『よしあし草』そのものは、「早稲田文学新著月刊等の囑望する処となりて、関西文壇の重を為し、一方に於ては江湖青年文士の歓迎を受けて益隆盛を致し、斬然として頭角を抜くに至る」（第一卷第三号）と揚言できるほど世に注目されつつあつたから、既成の文壇人ではなく、「純粋な文学的理想に燃える」強力な助っ人を求める気運が生じていたと思われる。

その助っ人起用に動いたのが、小林天眠であつた。明治三十一年八月十六日の夜、天眠は堺に『文庫』記者河井醉茗を訪問した。『よしあし草』への援助を依頼するためであつた。ちなみに醉茗は、明治二十八年九月の『文庫』二号から、堺在住のまま、その新体詩担当の記者になつてゐた。

「ひよっこり大阪からやって来たのが小林天眠氏である。それは明治三十一年の夏であった。小林氏のいふところによると、大阪に浪華青年文学会といふ団体が出来て、機関誌に『よしあし草』を発行して居る。まだ十号に充たないが、熱心な文学青年の集まりだから援助してもらひたいといふ事であった。……熱情があり覇気があり私もその熱意に動かされて快諾した。」(『毛布五十年』)と酔茗は記している。

この会見の膳立てをしたのは、当時、京都府立医学校の学生であった伊良子清白であったと思われる。清白と酔茗の交遊は明治二十八年五月五日に堺の酔茗宅へ清白が訪ねたことから始まった。二人は共に『少年文庫』(少年團)時代からの有力な投書家であった。

明治三十一年八月十日、天眠は清白と会っている。このおり清白は酔茗を浪華青年文学会に加えることを勧めたと考えられる。その結果、実現した酔茗訪問の成果を天眠は次のように記している。

『よしあし草』の詞藻欄が第九号から俄然勃興し、酔茗、清白、夜雨、白浪、野水、露子、汀水、橘村、虹川、八朗等、所謂『文庫』派精鋭組の清新なる佳作を誌上に掲げて、毎号殷盛を極むるに至ったのは、一に河井氏の援助を得たからであった。』

と。(『毛布五十年』<sup>⑤</sup>)

酔茗が浪華青年文学会の中核に入ったのは、明治三十一年十二月

一日からであった。この日、文学会の根本的改革が議せられ、『よしあし草』の革新、編集、庶務、会計の改善がなされた。次のようなメンバーであった。

編輯部 河井酔茗、中村春雨

庶務部 山川延峯、小石青麟

会計部 堀部靖文、浅井溪水、奥村梅臈、中村琴風

この会で堺支会の設立も可決された。編輯：河井幸三郎、庶務：河野通該、小林市次郎、会計：宅千太郎、評議員：真田広長、広沢元次郎、井上徹という陣容であった。会員は四十三名が記され、其の他に「差支ありて姓名の掲出を見合す」のが三十四名とある。記名会員の中に後の与謝野晶子の弟鳳簾三郎がいた。

さて、急遽浪華青年文学会の改組がおこなわれた原因は、高須梅溪の上京にあった。第二巻第十号(明治三十一年十二月二十日)に「本会幹事高須梅溪君這回上京新声社に入る」の記事がみえる。梅溪が突然佐藤橘香の新声社というところで上京したのは、面白い理由があった。天眠の語るところによれば、梅溪は小石青麟、山川延峯と共に小学校教員検定試験を受け、梅溪のみ無惨にも落第したので、発憤して東京へ趨いたのであったという。<sup>⑥</sup>

『よしあし草』の編集部に入った酔茗は文学会の経営に積極的に動きはじめる。『よしあし草』第十一号(明治三十二年二月二十五日)

の会告には、会の名称を「関西青年文学会」と改めると出ている。この名称変更は、同誌によると、二月十日、東区安土町の書籍事務所で五時から始めた第一例会において酔著と吉田桂舟によって提案され、異議なく可決されたとある。この例会には天眠は故郷の北条町に帰っていて参加していないが、この名称変更は、この三十二年一月三日に「近畿文学同好者新年会」が浜寺公園鶴廬屋で開かれており、天眠が今やこの会は関西文壇の覇権を掌握せんとする勢いがある。我々は関西文運の興隆のために奮起すべきであると演説しており、それを受けた挙であるといえた。

さらに、明治三十二年一月に思西金尾種次郎の金尾文淵堂から『ふた葉』（明治三十二年一月〜三十三年十月）、後身は『小天地』（明治三十三年十月〜三十六年一月）が出版されたことに対する対抗からの組織強化でもあった。『ふた葉』創刊時、金尾思西は数え年二十歳の青年であった。彼の店は仏教専門の書店で、思西で三代目に当たっていた。思西は文芸書発行に野心を持ち、その準備というか、地盤固めのために、まず雑誌発刊を企てたらしい。手本は自分も会員である関西青年文学会であった。『ふた葉』の第一号末には文淵会々員募集の記事が出ており、第四号（明治三十二年四月）の広告には、浜寺公園一力楼支店楼上での文淵会春季大会の通知がみられるし、第五号（明治三十二年五月）には、客員として巖谷漣、後藤宙外、正

岡子規等、大阪では磯野秋緒、角田浩々客、木崎高尚等があげられている。すべて浪華青年文学会の活動の軌跡をなぞったものであった。この頃の文淵堂のブレイン的存在は思西の竹馬の友であった青木月兔（後に月斗）があげられる。やがて薄田泣菫が加わって『小天地』に発展するのだが、この部分では深くふれない。『よしあし草』側によって、この有名な文淵堂が相当な資本をかけてとり組んだ『ふた葉』は恐ろしい敵であった。しかし金づくりではどうにも太刀打ちできないが、「雑誌の内容としては寧ろ反対に『よしあし草』の方が潑刺たる精彩を放って居る」と自負していたという<sup>⑦</sup>。ちなみに関西青年文学会と改称を告げる第十一号に鳳小舟（晶子）の新体詩が出、堺支会に彼女の入会がみえる。

明治三十二年二月十九日、堺支会・姫路支会につぐ神戸支会第一例会がもたれた。大阪本部から中村春雨と吉田桂舟、それに天眠が参加した。天眠はこのとき故郷の北条町に帰郷していた。奉公先の西村商店が廃業したためであつたらしい。神戸へ出る途中、姫路支会を訪ねて、会員と交歓している。このおりの天眠の日記<sup>⑧</sup>があり、当時の文学青年達の文学サークルの実情を知るよき材料であるので引用してみる。

二月二十九日（明治三十二年）晴、日。

午後六時に起きて七時二十分出發（播磨北条町）<sup>徒歩</sup>（二里余）にして九時に福崎駅（播但線）に出づ、同四十分の發車にて野里駅（姫路市内）に下車すれば、約に応じて杉、柿堂（小疇）、菊地（庫郎）、神村、山下等の諸氏停車場にて待受け呉れられたり、それより同道して白国梅林に出づる途にしも、田中（染耕）、松下等七八名の同志（よしあし草）の士も来り会し、共に俱に、梅林を逍遙し、午後田中氏と練兵場を経て停車場（姫路駅）に出で、三時二十分の急行にて五時前神戸に着す、当日開会あるべき関西青年文学会神戸支会第一例会場たる花隈の地藏堂に向ふ、途すがら偶然春雨、桂舟（吉田）両子と逢ひ共に会場に行く、六時には開会されたり、会する者凡そ三十名、中々の盛況にして就中硯友社の一将江見水蔭が快談は大に裨益する処ありたり、午後十時過ぎ散会、それより春雨、桂舟、染耕の三子と共に白浪（二色）君の寓へ行き、火鉢の中に取囲みて夜もすがら語り明かさん積りにて、いつしか此日は談笑の裡に終りぬ。

二月二十日、晴、月。

未明より七時過ぎまで転び寝（炬燵を繞り）して、起き出でたる後ち例の五人男打連れて湊川を越え、兵庫を過ぎ、快く談笑しつ、長田神社に詣で、須磨に出て、名物の敦盛蕎麦を食ふ、終日

句吟などして白浪、春雨、桂舟の三子は午後四時の汽車にて東へ、染耕と余は四時半の汽車にて西へ別れぬ。姫路へ六時に着きて直ちに柿堂子の門を敲く、会々神村氏も来り又々四人昨夜の二の舞を為し、其夜は柿堂子の宅に泊す。

天眠は九月に自分の店を持つまで、故郷の北条町を根拠に行動する。明治三十二年四月三日に、関西文学同好者大会が神戸の垂水で開かれたが、天眠は北条町から祝電を寄せた。ちなみに、与謝野鉄幹は周防徳山から祝電を寄せている。<sup>⑥</sup>翌月の五月二十一日には、天眠は姫路支会の第四例会に出席し、「沈痛なる口調を以て文学の真味より延て本支会員の責務」を述べられたとある。五月十八日の第五例会にも参加している。この故郷の支会育成に懸命な様子がかがえる。

やや筆がそれるが、『よしあし草』第十四号（明治三十二年五月二十五日）の「論壇」に「常住の意識を缺く国民」の論文がみえる。筆者は御風とある。天眠は相馬御風であると記している。

その要旨は、わが国民の多くがその意識の根底に確固不拔の觀念を有しない。換言すれば、一定常住の意識に乏しい国民と言わざるを得ない。故に、我国には古来大思想家なく、特産の哲学がない。国民は外来の刺激に動かされやすく、随時の衝動に従つて推移する

が故に、沈黙考して森羅万象に存する普通の真理を得ようとする暇を持たない。仏教が入るとこれに靡き、儒教が伝えられるとそれを崇拜する。維新後西洋文明が輸入せられると、この皮相な物質文明に幻惑して、模倣をこれ勤めるのみ。その弊害は社会に教育にあらゆる分野に及んでいる。日清戦役以後戦捷の全威は事業熱の勃興をもたらし、経済の紊乱となり、過大の軍備拡張は国民に重租苛税をもたらしこととなった。すべて一定、あるいは永久の思索を欠くことが原因になっている。

社会は「美風徳行地を攘ふて敗徳汚行類に行はれ、巧に法網を潜り非行を働きて、恬として耻ぢず、人又之を咎めず」という有様、この因も常住永遠の観念が乏しいところであろう。

教育が西洋思想の輸入と共に智力注入の教育に偏し、人心が物質的に流れ冷刻に失して、温和なる感情、健全なる意志を有しないこと。

作家が時代精神を解せず、深く察し広く観ず、世間俗物の衝動に應じて漫然筆を下して虚名を収めることのみで足れりとし、大文学を産出することができないことも、すべて一定永久の思索を欠くところからきている。結びとして、次のように書く。

「嗚呼染め易きものは褪せ易し、一定の想思不拔の観念なく時々に移り、止まる所を知らずんば、百年の大計其れ何れの日に

立する事を得んや、莫遮吾人は事物の変化推移は進歩の階梯なり要は一箇不拔の成心を有して、外来のものを其鑄炉に溶解して其長を取り優を抜き以て我美を増すにあるのみ。」

この趣旨は北村透谷が「漫罵」（明治二十六年）で論じているところであり、十二年後の明治四十四年に夏目漱石が「現代日本の開化」という題で講演している内容でもあった。この警醒的な論文が相馬御風の筆になるとすると、この時、御風は弱冠十七歳、高田中学の四年生である。年譜によれば、相馬昌治が御風の号を使用するのは、明治三十三年の佐々木信綱主宰の「竹柏会」に入会し、一方雑誌「新声」に短歌を投稿する頃からであるというから、この論文の書き手としては、いささか疑問が残るが、天眠の記憶通りなら相馬御風の処女論文ということになろう。

明治三十二年頃、天眠、堀部靖文、中村春雨の三人が、某銀行の貯金宣伝方法の懸賞募集に、天眠が小説、靖文が新体詩、春雨が雑文を載せた小冊子を作って投稿し、当選して十五円の賞金を貰い、それを、そっくりそのまま関西青年文学会へ寄附するというようなこと<sup>①</sup>もしている。大工の一日の手間賃が六十六銭であったときの十五円であるから、かなりの大金である。會計的に不如意の会のこと、常に印刷代も滞りがちで、印刷所へ校正行つて忘れて来た蝙蝠傘を取りにも行けないようなことが、始終あつた苦しい台所を、少し

でも助けようとする筈であつたのだろう。

明治三十二年七月一日、土佐堀青年会館で文学同好者春季大会が開催された。そのおり、米田哲学博士で、平安教会牧師の半月湯浅吉郎の「ミルトンの失樂園に就いて」の講演がなされた。前講として中山鼻庵の「文学は精神的宗教也」と、山川延峰の「社会革新の動機としての文学」があり、参会するもの六百余名という盛況であつた。これを、天眠は「大阪における最初の文芸講演会」と記している。史詩『十二の石塚』の作者として著名な湯浅吉郎の講演内容は、ミルトン (John Milton) の出自、教育、成長後イタリア、フランスに遊学して、ダンテの墓に詣で、その地の演劇を見るうち、アダムとイヴ、神、サタンに考えが及び大長編叙事詩を作ろうと思う。さらに、ギリシア、トルコを経てパレスチナへ行かんとしたおり、故国の民が自由のために戦っていると聞き、いそぎ帰国、内乱の悲惨さを見て「失樂園」(PARADISE LOST 1667)執筆の思想が固まつた。ラテン語の知識をかわれ、クロムエルの書記官となつたが、王政復古となつた結果、王党派に追われる身となつた。しかし、すでに盲目となつていた身故に、王の目こぼしにあずかる。とはいへ、世は反対党の天下、身は盲、不平不満の中で、二人の娘にラテン語を教えつつ、筆記させるといふ困難の中で、詩作をつづける。天国や地獄を主題としたのは、このような大命題をとり扱う

ことで、自由自在に筆がふるえると考えたからであつた。ミルトンの最初の意図は、演劇として観るべき「失樂園」であつたが、後には耳に聴くべき叙事詩とせんとした。この詩の完成までに、二十三年かかり、一六六七年出版。ミルトンの詩の真価を認めたのは、コレッチ (Samuel Taylor Coleridge 1772-1834) であつた。この一大叙事詩編の生命は神の力、神の慰め、人間の罪という大問題に説明を与えたことであつた。といったもので、「失樂園」について、要領よく解説したにすぎないものであつたが、これをアメリカの大学でユダヤ文学、ヘブライ語、聖書学を修めてきた詩人・学者から聞いたことに、大きな感銘を受けたものらしい。この講演会は兎角「大成功」であつたという。

ちなみに、湯浅吉郎と『よしあし草』の関係は、第二巻第二号(明治三十一年三月二十六日)に「宗教と美術」を発表してからであつたと思われる。彼の第二詩集『半月集』が金尾文淵堂から出版されたのは、この講演会の成功によるものと考えられる。

上京して学校に入る準備に刻苦精励、血の滲むような奮闘をしてきた中村春雨がとうとう、明治三十二年八月の末頃、東京専門学校へ入学するために東上した。『よしあし草』第十八号(明治三十二年九月二十日)に、その報告と友人琴風の、思ひおもひて定めたる

君があづまのかしま立  
しづ心なくとめねど

思へば惜しき名残かな

で始まる「月の宿」と題する長詩がみえる。

「春雨の寄寓先は、『東京市牛込区矢来町三番地 広氏方』(『よしあし草』第十九号)であった。以前から文通していた縁で、ひとまず硯友社作家広津柳浪宅に身を落ちつけたものらしい。その後しばらくは、柳浪の息子俊夫と和郎の家庭教師兼玄関番をしながら、東京専門学校へ通い、坪内逍遙に師事していた。⑭ちなみに、彼は哲学及英文学科に学んでいた。

さきに高須梅溪が東上し、今回は、春雨が上京し、会の創設者ともいべき一人が去ったことは、関西青年文学会にとつて、大変な打撃であった。そのためであろう、『よしあし草』(第十八号)の巻頭には、

「本誌が初めて遼遠なる希望を抱いて、此浪華の地に呱呱の声を揚げしより幾ど三年に涉り、後ち文運の趨勢に伴ひ、一大飛躍を試み関西の野に一旗幟を樹ること茲に月あり、即ち本誌の基礎確立するを視て、梅溪氏に次で春雨中村氏亦東上せらる、関東との連絡是れに依りて益堅く本誌の普及亦將に全からんとす、然れども由来詩神に私なく文学に関の東西なし内に青年気鋭の士を集め、

外に先輩達見の扶を得、今やこれ覇を関西に構えて鼓を宇内に鳴らすの時なるを信ず、此一転機を利用して如何に刷新の実を挙ぐるかは、乞ふ次号以後の本誌に徴せよ。」

と、悲壮な決意のみなざる檄文調のものを載せている。後は、河井醉茗を中心として、小林天眠、堀部靖文、中山泉庵、西村醉茗が会を支える形となった。

故郷北条町に帰っていた天眠が、明治三十二年九月六日、大阪船場の安土町四丁目心齋橋筋に毛布卸商を開店した。田舎の家も田畑も売り飛ばしての、乾坤一擲の勝負であった。彼は二十三歳。雇人は前の西村商店で共に丁稚奉公した荒谷房太郎(十七歳)に、北条から連れてきた爺やさん、阿波の小松島から来た磯吉という丁稚とんで、間口わずか二間の小舗で、男ばかりの生活が始まった。この開店は叔父の小野寺秀太の強い勧めによつた。天眠自身は、北条にいて、家業に従事しながら、好きで好きでたまらぬ文学に精進したいというのが、本心であった。⑮

当时を回想して、天眠は、  
「大都会大阪の中心街に、僅少の資金を投じて開店した私も私ながら、後見人の叔父も叔父である。畢竟実業家でなき長袖のお医者であつたればこそと、後年数次バニックに襲はれて苦難時代に入ると、いつも回顧して苦笑したことであつた。」⑯

と記している。開店早々の天眠達の仕事は、普通の小売業者を廻つて、注文をとるやり方は、新店の場合、あまりふるわないと思われたので、「宿屋廻り」をすることであった。これは上阪した諸国の仕入商人の定宿へ、自分の店の品物を見せるために、迎えに行くことであつた。大阪四区の至るところに、そういう商人宿があり、遠い所の宿では、川口の古川橋、水分橋、中之島七丁目の辺まで迎えに行ったという。そんな遠い処まで、朝食もせずに急いで出かけると、客はすでに人力車で出掛けたといわれ、行先を聞いておいて急いで帰店して、朝食をすませ、すぐお客さんの行先を尋ねまわつたものの、皆目行先がわからず、一日歩きづめで棒にふつて帰つた日もあつて、体重十一貫の腺病質な天眠には、病氣しないのが不思議なほどの、重労働であつた。<sup>①</sup>

こうした商売上の多忙さにかかわらず、天眠の文学への情熱は、ますます熾烈で、当時の日記を見ると、関西青年文学会の会員達とさかんに交遊している。<sup>②</sup>

九月十日、夜、浪華青年文学会の例会に出席す。

九月十七日、伊良子清白来る。夜、浅井淡水、三村薫風、岩橋繁

男、中山鼻庵君も参加六名にて淀川を短艇に乗じて  
乗り廻し、十三夜の月を観る。此夜、伊良子、中山、  
浅井の三君泊す。

九月二十三日、午後二時半、浜寺に河井醉茗君を訪ひ、引返して  
堺に下車、南宗寺に小林泉舟を訪ふて帰る。

九月二十八日、堺に河井醉茗を訪ひ、「よしあし草」を談じて帰る。

夜、中山、堀部、浅井の三氏と文学会の事を相談す。

九月二十九日、朝来歯痛及び頭痛劇しく閉口す。午後四時五十五  
分発の列車にて明石へ行く。

最後の二十九日の記事は、天眠の発病を語るものであつた。苛酷な労働が早々に脆弱な彼の肉体を蝕むだらう。明石へ行くというのは、叔父の小野寺医院へ行ったので、クレオソート剤の丸薬を貰つて帰り、それから後は、これを食膳の抽出しに入れて、根氣よくそれを服用しつづけたという。二十九日以後の日記は、病氣の記事の羅列である。少々引用する。<sup>③</sup>

九月三十日、明石に滞在す。

十月一日、午後一時帰阪す。

十月五日、体重十一貫三百目。

十月十日、夜、浪華青年文学会の例会に行く。来会者二十五名。

十月十一日、午後四・五十五発明石へ行き一泊す。

十月十二日、受診後薬品を貰ひ、午後七時前帰阪す。

十月十八日、体温三十七、三十七・一。夜中山鼻庵と共に三木天

遊氏を訪ふ。

十月十八日の夜のことを、天眠は次のように記している。三木天遊の宅で、中山梟庵、天眠に三人が、文学談から哲学談へ、更に靈魂不滅問題に移り、しんみりと深夜まで語りつづくるうちに、いつしか鬼気室内に横溢して、さらでだに神経質の天眠が、折ふし微熱の続いている最中でもあり、終にフラフラになって、悚然と顫え上り、惶惶として辞去したと。<sup>20)</sup>

少し、三木天遊にふれる。天遊三木猶松は、明治三十年、繁野天来との合著詩集『松虫鈴虫』を出版して、新体詩人として注目されたが、妹の死によって、自分も病を得て、東京専門学校も退学して帰阪し、在阪の文人の薄田泣菫、菊地幽芳、平尾不孤、角田浩々歌客と交遊をもち、『よしあし草』には第一巻一号から、本会客員の地位を与えられて、新体詩「手折らじの曲」(第一巻第二号)を発表し、以後も「秋海棠」(第十号)、「あだね」(十三号)、「まぼろし」(十四号)、「夏の旅」(十五号)、「きま、ごと」(紅蓮白蓮)「虫うり」(第十九号)、「ゆく水の吟」(第二十号)、と多くの新体詩を発表し、その間、選者にもなり、時文に筆を染めたりもした。しかし、金尾文淵堂の『小天地』に発表舞台を変えて『よしあし草』から離れ、明治三十九年七月の『早稲田文学』に「夏湖雨月」を発表して以後、「消えるように文壇から退い」た。関東大震災の日を境に消息不明となり、<sup>21)</sup> 醉茗が天眠に「三木天遊ともあらう大詩人を、生死不明の

儘で捨て置くとは、我國の詩壇の恥辱である」と慨歎したという。

この年の十月末か十一月初頭に文学会の有力メンバーの一人、醉夢西村真次が上京したらしい。『よしあし草』(第二十号)の転居通知には、「東京神田区錦町二丁目六番 佐藤方」となっているから、高須梅溪と同じく、新声社の佐藤儀助の許へ、身を寄せたらしい。醉夢は中村春雨と同じ実業学館に学び、春雨を仲介として高須梅溪とも親しくなり、三人の仲を三角同盟と称するほど緊密な交遊があった。実業学館を退学した後、地方銀行に勤めたが、日曜日ごとに春雨を訪問し、春雨のとつていた早稲田文科講義録をみて、梅溪と共にとるようになったという。醉夢は評論に長じ、「物在人亡」(『よしあし草』第六号)、「観念小説を汎論す」(同、第九号)、「裸体画を論ず」(同、十号)等があり、後に東京朝日新聞記者、早大教授になった片鱗がうかがえる。ちなみに、天眠も東京専門学校校外生として、文科の講義録で学んだという。春雨の影響であったのかも知れない。

醉夢上京の憂さを払うかのように、明治三十三年の関西青年文学同好者新年大会が、一月三日、浜寺の鶴廬屋で、盛大におこなわれた。参加者は三十一名、河井醉茗、小林天眠、堀部靖文、中山梟庵といった幹部級の外に、外から支える伊良子清白、堺支会の活動家宅雁月、河野鉄南等の名がみえる。鳳小舟は「わざぐく挨拶に來ら

れたので、但し一々諸子にハ会はれなかつた」という参加であつた。この新年大会を報じる『よしあし草』第二十二号の記事の続きに、東京新詩社の広告がみえる。そして、その翌月の『よしあし草』の詞藻欄に、与謝野鉄幹の「人を恋ふる歌」が掲載されている。この詩の第三連中の、

簿記の筆とるわかものに

まことのをのこ君をみる

を、佐藤春夫は、『晶子曼陀羅』の中で、「この友というのは、鉄幹が生涯の友であつた毛問屋の天眠小林政治を指したかと思われる節が多い<sup>②</sup>」とした。さらに続けて、

「本来この歌は題名の傍に注記して『三十年八月京城において作る』とあるが、じつは『よしあし草』三十三号―三十四年新年号にはじめて公表されたもので、前年の夏、大阪、堺、神戸、最後に京の展覧をすまして予定より十日もおくれた八月十九日の終列車で帰京の途すがら登美子か晶子かと心中に妻をえらぶうち興到つてそぞろに腹案のなつた力作を、翌年の新年号に寄せて『よしあし草』の同人や意中の二少女に示してその友情を酬いたものであつた。」(第八章 妻をめとらば)

と述べている。佐藤春夫は、この詩の『よしあし草』への発表時期をずらし、詩そのものの構想は前年三十三年の夏になつたとした。

先学が既に説かれるように、この詩の初見は、明治三十二年十二月五日刊の『伽羅文庫』であり、そのおりの題は「人を恋ふる歌」であつた。それに、三連ほど補い、題も「人を恋ふる歌」とし、明治三十二年十二月二十五日刊の『国文学』に掲載し、次いで、そのままの形で、『よしあし草』二十三号に発表し、最後は、詩集『鉄幹子』(明治三十四年三月十五日刊)に「三十年八月京城に於て作る」の注記を加えて載せたのであつた。<sup>②</sup>従つて、この詩は丸野弥高氏の説かれるように、「鉄幹が韓国から最後の帰国をした三十一年三月以降のある時期に、恐らく明治三十二年の末頃か、自分を『三十年八月』の当時に置き、浪漫的立場で、虚実を織りまぜて作られたもの<sup>②</sup>」と考えるのが、最も妥当ではなからうか。

佐藤春夫の言う「人を恋ふる歌」が発表されたという『よしあし草』三十三号は存在しない。『よしあし草』は、その後身の、『関西文学』を入れても、通算三十二号で終刊になつてゐる。一方、三十四年新年号をとつてみても、それは「初がすみ」という題の四六判百五十頁の臨時増刊号で、そこには、新体詩は載つてゐるが、鉄幹の詩はない。

それでは、小林天眠が鉄幹と初めて会つたのはいつか、天眠の言うところによれば、明治三十三年の大阪安土町書籍事務所での関西青年文学会の例会の席上であつたという。

「其頃大阪には私共の『よしあし草』『関西文学』と金尾文淵堂の

『ふた葉』『小天地』とが対立して居りましたが、最初与謝野氏が其頃上京して居た高須梅溪君の紹介で大阪へ参られた序を以て、

私共『よしあし草』の会合の席へ出席するとの事であったので、

幹事が相談しましたが、其頃の与謝野氏は薄田泣菫との関係上

『小天地』派に重かったやうな風に見えたので、『よしあし草』の

同人中に食はず嫌ひ的の毛嫌ひした者もありましたが、中山梟庵

君等の豪の者共がなアに会って見よう、さうして吾々と意見が合

はぬやうであれば、議論をしてぶんなぐってやらうじゃないか！

てな勢ひで、初めて文学会例会の席上でお会ひしたのであったが、

『東西南北』『天地玄黄』の作品を通じて想像して居た、容貌魁偉

の所謂「虎の鉄幹子」が、意外にもスマートな貴公子然たる与謝

野氏であったので、すっかり拍子抜けがして、内心腕を捲つて居

た連中の喧嘩腰気分も解消して了って、新詩社に好意を持つやう

になりまして、頓で発刊された『明星』を謳歌し、歓迎するやう

になったのであります。」「故与謝野寛を懐ふ」『毛布五十年』

と。鉄幹が安土町の書籍事務所の例会に参加したというのは、その

年の八月五日のことであった。「人を恋ふる歌」が作られた頃は、

天眠ぞ鉄幹の意識になかったことである。右の鉄幹の詩に関する

『よしあし草』や小林天眠のことは、佐藤春夫のいう「絵そらご

とまことまぼろしうた心」としか、いいようがない。

中山梟庵、天眠といったうるさかたがすっかり、鉄幹党になって、新詩社支持にまわつた四ヶ月前に『明星』は呱呱の声をあげていた。

その折、河井醉茗が大げさとも思える歓迎文を書いた。「輝けよ明星、闇黒なる新詩界の一面は『明星』に因りて其光明を得ん」(『文

界の『明星』出づ』と。②)しかし、関西青年文学会内に『明星』支持

体制を作る暇を醉茗は持たなかつた。既に、「家の遺業を廃し、東

上の志」(『醉茗詩集』大正十四年十一月)を実行に移す寸前であつた。

醉茗は五月八日に東上し、根津須賀町に居を定めた。

醉茗の上京の影響であつたのだろう。『よしあし草』五月号は休

刊になった。六月号は発行されたが、この第二十六号で終刊となつ

てしまった。この原因については、大黒柱の醉茗が抜けたことと、

経済的な基盤の弱さからくる慢性的な資金不足があつたと考えられ

る。

小林天眠、堀部靖文、中山梟庵等の大阪残留組は、これでもって

『よしあし草』を終刊にすることなぞ考えなかつたらしい。『よしあ

し草』第二十六号の第七例会通知には、七月十日午後五時から、例

会を開き諸般の重要な事項を議決したいから、本会の関係あるも

のは、万障を排して参加せよとある。再建について種々論じられた

のであろう。『よしあし草』が矢島誠進堂の『わか紫』と合同して、

『関西文学』となつて再出発することが、どのような経緯でまとまつたかはよくわからないが、『わか紫』との合併を画策した一人に高須梅溪がいたらしい。『明星』第五号(昭和三十三年八月)の「梅溪・春雨の二氏暑中休暇間相携へて関西へ帰省した。梅溪氏は『よしあし草』の改題『関西文学』と『わか紫』との改善に就いて大阪で鋭意計画中だ」とみえるのは、この間の事情を物語るものではないだろうか。

『関西文学』第一号(明治三十三年八月十日)は、その巻頭がみどり色の用紙に印刷されている。天地の緑、それがもつ清新、活動、生々に新出発の『関西文学』があやかるようにしたいという気持ちかららしい。

なぜに『わか紫』と合同するに至つたかについては、第一に『わか紫』の主張する風氣ムツキの肅正と文学の振興が、『よしあし草』の主義と一致していたため。第二に『よしあし草』の内容と外形とを革新して、実質のある、趣味のある一大文学雑誌に為し、関西文学界の昏睡と寂莫とを打破せんとした試みが、『わか紫』の一生面を開かんとした目的と一致したため、であつたという。表紙の図案は流行画家の中村不折の筆になり、編集は天眠と中山梶庵が担当したらしい。編集兼発行人は梶庵で、編集所は天眠の店になつていた。天眠は皆が「更生の意気に張り切つた」<sup>②</sup>と書いている。

天眠は新生の心意気を示すべく、「二枚おひづる」という小説を発表している。

幼な馴染の女と、料理屋で邂逅した酒屋の若い番頭が、その女のめり込んでゆき、店もしくじる。女には落籍せうという客が付き、二人は井戸に身を投げ、男のみが助かり、男は西国三十三ヶ所の巡礼に出る。男の背後に女の亡霊が現われる。怪談仕立ての短編。

これは、天眠が商売を兼ねて紀三井寺に詣でた体験が材料になっているという。この作は、読んでみると、その筋の運びや表現力に感心させられるが、読みおえると、何も残らない。要するに、登場人物が描かれていない。宇田川文海等の新聞小説を毎日／＼克明に筆写して小説の勉強をした<sup>②</sup>というように、通俗小説の域を出ていないのである。

『関西文学』第二号には、先に引用した天眠の文章にあつた八月五日の例会のことが、「消息」として詳しく報告されている。その消息を簡潔にした小泉荃三氏のを借りて、その跡をたどつてみる。

八月三日 与謝野鉄幹来阪 平井旅館に投宿。

五日 文学講話会を開く、来会者約五十名。

六日 鉄幹浜寺に赴く。来会者雁月・鉄南・琴風・月啼・登

美子・晶子等。

七日 神戸山手倶楽部にて文学講演会を開く。来会者四十余名。

八日 鉄幹の旅寓に来訪する者、琴風・思西・晶子・和久・服部・登美子。

十日 岡山新詩社支部の聘により鉄幹同地に赴く。帰途再び浜寺にて歌筵を開きたる由。

(『よしあし草・関西文学年表』)

小泉荻三氏はこの記事に注して「この消息は鉄幹と『関西青年文学会』同人との最初の会見を伝へたもので、鉄幹は晶子・登美子とも初めて逢ったのである。この会見の結果が直ちに『明星』の浪漫化に影響してゐることは注目に価する。」と記している。『明星』浪漫化云々はおくとしても、これが文学会々員と鉄幹との結びつけを強めたことは確かであろう。天眠は鉄幹に魅せられてしまったらしい。神戸支会の講演会にも出席し、その後斎藤溪舟、平忠宣等神戸支会の面々の舞子行に加わり、車中、鉄幹出題の「汽車」で、日頃は作らぬ和歌を作り、「天眠子を和歌を作りしは大に奇に候ひし」と皮肉られている。<sup>①</sup>

関西青年文学会々員と鉄幹との会見以来、各支部に短歌グループが誕生し、それらの会が多くの方作を発表し、「短歌」欄が著しく充実したことであった。最も早く結成したのは、河井醉茗の主宰し

「天眠小林政治伝」の試み (一)

た新星会で、『よしあし草』二十二号にみえる。次いで、「あけぼの会」(神戸)、「紫明会」(京都)、「みさお会」(岡山)、「みるめ会」(御影)、「玉の浦会」(長崎)、「百渦会」(田辺)といった会が、踵を接して結成されている。各会の詠草は『関西文学』に載せられ、そのうちの幾首かが、『明星』に発表されたようである。従つて、明石利代氏の言われるように、<sup>②</sup>これらの短歌会は『明星』支援のために作られたと考えることもできる。

天眠の本領は小説にあった。この年のうちにも、さきにもた「二枚おひづる」の他に、「あだまくら」(『文庫』第十四卷第二号、明治三十三年二月十日)、「宮島曲」(『新小説』第五卷第十二号、明治三十三年九月二十五日、これは第一位で当選、二九五点)がある。宮島曲は、旅の途中の宿で死んだ巡礼の子が、その家の息子と兄妹のように育ち、末は夫婦と思ひ定めていたところ、家が全焼し、女は酌婦になつて稼ぐうちに、旦那ができて次第にもとの男を疎ましく思い、避けるようになる。男は女の借金が返せて、家が新築できれば夫婦になれるものと、金の亡者となつて稼ぐ。女が旦那の奥様におさまると、男は狂つてしまう。この小説には天眠も自信があつたらしく、九月十六日の関西青年文学会の例会には、この小説の筋を一時間半にわたつて、当夜の参加者に語り聞かせ、例会の終了は十一時を過ぎたといふ。<sup>③</sup>

前者の「あだまくら」は、明らかに失敗作といえると思う。

一度は駈落ちまでして、一緒になった男女が、男の不実から別かれわかれになり、女は迷いから醒めて、親の勧めめる男と夫婦になる。

一度は女を捨てた男が、女につきまとい、今の男の賭場を密告し、ために夫は監獄に入る。男はさらに執拗に言い寄り、自分との間にできた児を墮胎したことを、その筋を告げんと威す。進退きわまつた女は、男の言うがままになる。夫の出獄する時が近づくとつれ、自殺を思うが、子供のこと、母親のこと、今の夫のやさしさが思われて、実行できないでいる。出獄の日、監獄署へ迎えに行くと、夫は侠気から、看守を殺めて、刑期が延びたことを知らされる。女は「ハッと愕きて無量の悲しみを堪へたる心の半面には、あはれまざしくも、喜びの反影を宿したりき」であつたと。

二つの作品は、下層社会の中で、悲惨な境遇や事件に翻弄される男女を描いている。そこから、深刻小説（悲惨小説）とよびうると思われるが、筋の変化に重きがおかれ、登場人物の行動の内面的洞察がみられない。特に「あだまくら」は姦通に走らざるを得なかつた女の弱さを描きながら、内面の動きがほとんどみられない。ただ最後に女の悲喜相半ばせる心理がでるが、あまりにも類型的にすぎると思われる。

明治三十四年一月の『初がすみ』には、天眠は宮本此君庵と合作

で「尺二寸」という小説を発表している。天眠好みの構成で、彼の趣向によつて書かれた感が深い。恋女房と無理やり別れさせられた煙草職人が、妻の義母を殺すために、鍛えられたばかりの出刃包丁を持つて、義母の料亭に向かうというもの。包丁を打った鍛冶屋の爺と職人の会話が見事に書かれている点をのぞき、見るべきところのない作である。天眠の合作小説は、これが初めてでなく、『よしあし草』第九号には、無絃、春雨、泉舟と合作で、「雪がくれ」という作品が載っている。四人もの作者による合作からくる不自然さが目立つ作で、関西青年文学会堺支会の設置を記念して、友好を深めるために書かれたにすぎない作である。<sup>④</sup>

さて、『関西文学』第六号（明治三十四年二月二十日）に、次のような困み記事が出た。それは、出版元の矢鳥誠進堂が「新著の出版日に多く、為めに事務非常に繁忙を極め」るために、「今回は止むを得ず一時休刊」というものであつた。この休刊宣言をもつて『関西文学』は廃刊になるのだが、矢鳥誠進堂側だけでなく、関西青年文学会側にも、廃刊せざるをえない理由があつた。それは、天眠によると、「同人が相ついで東上する、研学のため各大学へ入学する、実業界に在る者はそれ〳〵責任のある地位に進む、そのため雑誌は終に廃刊するの止むなきに至<sup>⑤</sup>」つたのであつたという。出版元は経済面から、編集側は同人達それぞれが本道に邁進せねばなら

ない時期になっていた、この二つが合して廢刊という結果になったのであったというべきであろうか。誌齡は通算第三十二号であった。

天眠はいう「またその会は当時大阪以外、各地に十数の支部や支会を持ち、会員の数は千二百を計上してゐたのです。たとひ会員の誰れもが各々の一身上の都合から居家処世の急に迫られてその暇がないため、雑誌は廢刊するにしても、これだけ骨折つて纏めて来た会をこのまゝムザムザ解散して、会員が永久に離散して了ふことは、いかにも残念である。暫く隱忍して文学に遠ざかるにしても、他日各々が社会的に夫れ々の地位を築きあげた上で、更らに捲土重来、文学運動を起そうじやないか、それには将来文士の立場を擁護するため、理想的の出版会社を興すに若くはないと言ふ意見が多数であった<sup>⑥</sup>」と。これが後に資本金十萬円の株式会社天佑社の創立となるのであった。天佑社のことは稿を改めて綴らうと思う。

最後に、天眠が新詩社へ資金援助をはじめたのは、いつであつたか。その最も早いものは、『明星』第七号（明治三十三年十月十二日）で、「左の諸君より『明星』出版費の内へとして金員を寄贈せられ候。爰に社友を代表して謝意を表し候」として、天眠の三円の寄附が報告されている。ついで、第十号（明治三十四年一月一日）に出る「新詩社基本金の醸出に就て同感の諸君に告ぐ」の主唱者の一人として名を連ね、次号の「新詩社基本金醸出第一回報告」の到達順の

先頭に「金五円小林天眠（大阪）」とある。

一まず、ここで筆を擱こうと思う。天眠の、与謝野鉄幹、晶子との交遊、天佑社の設立、事業の拡張、中村春雨への友誼、真下飛泉救援運動等々は稿を改めて綴らう。

注

- ① 「大阪時代の中村吉蔵君」西村真次「故中村吉蔵博士追悼集」小林政治編纂 昭和十七年五月一日。
- ② 「よしあし草」『関西文学』の解題 明石利代、「解説「よしあし草」・「関西文学」複製版 別冊」日本近代文学館 昭和五十一年五月。
- ③ 「解説」小島吉雄 右の書に所収。
- ④ 「四十とせ前」と「よしあし草」
- ⑤ ④に同じ。
- ⑥ 「附その頃を語る」『四十とせ前』
- ⑦ ⑥に同じ。
- ⑧ 「親友中村吉蔵君と私他一編」『中村吉蔵博士追悼集』。
- ⑨ 「垂水に於ける文学者同好者大会」さくら戸、「よしあし草」第十三号。
- ⑩ 「相馬御風の人と文学」紅野敏郎、相馬文子、名著刊行会 明治五十七年六月二十日。
- ⑪ ⑥に同じ。
- ⑫ ⑥に同じ。
- ⑬ ⑥に同じ。
- ⑭ 『近代文学研究叢書』48 「中村吉蔵」の項 昭和五十四年一月三十日。
- ⑮⑯⑰ 『毛布五十年』「安土町に開業」の項、「五十年前の大阪毛布問屋」の項にみえる。

- ⑱ ⑲ ⑳ 右の書の「病弱より健康へ」。
- ㉑ 『近代文学研究叢書』22 『三木天遊』の項。
- ㉒ ⑱に同じ。
- ㉓ ⑰に同じ。
- ㉔ 『佐藤春夫』 日本文学全集 集英社 昭和五十一年十一月十五日。
- ㉕ 「人を恋ふる歌」について 丸野弥高『浅間嶺』通卷一七〇号 与謝野寛先生生誕百年記念号。
- ㉖ ㉕に同じ。
- ㉗ 『よしあし草』第二十五号『時文片言』
- ㉘ 「附その頃を語る」『四十とせ前』
- ㉙ ㉘に同じ。
- ㉚ 『立命館文学』昭和十三年一、二、三月号。
- ㉛ 『関西文学』第二号『消息』
- ㉜ 「関西における明星派の動向」『国文学』「明星派の人と文学」第九卷第十五号 昭和三十九年十二月二十日。
- ㉝ 『関西文学』第三号『消息』。
- ㉞ 「合作小説『雲がくれ』に就いて」『毛布五十年』。
- ㉟ 「丁稚の修行」『毛布五十年』
- ㊱ ㉞に同じ。